玄象の琵琶

土田龍太郎

およそ琵琶といはば本朝にて絲竹管弦の遊びに缺くまじきものなれど、その濫觴とては震旦天竺ならでさらにはるけき西のさかひなる波斯國に尋ぬべくして、もとは胡人の馬上にて奏でし樂器なりといへり。本朝に渡り來れるはそもいつなりやたやすく知りがたけれど、ここにて古くより名の知られたる琵琶の逸物、玄象牧馬井手渭橋など少からねど、奇特ならびなかりしは玄象にほかなくしてたへにあやしきことどもくさぐさ語り傳はりたり。

玄象靈異譚を收むる典とては今昔物語江談話抄古今著聞集續古事談など數へあぐるをうべし。それらみながらけみせむはいともこちたくてえうありとおもほえず。今はただあらあら辿りみるばかりにてかつがつことたらひぬべし。

村上天皇の御世に玄象の琵琶にはかに宮中より失せにしことの始め終り、今昔物語につぶらに説きたり。このとき主上いたく歎きたまひけれど、管弦の道に名を得たる源博雅、夜ふけて清涼殿にありけるが、玄象彈く音の南より聞えければ怪しみにたへぬままに朱雀大路より羅城門に至りかしこにて叡慮のおもむきを宣りつつ、こともなく鬼神より玄象を取り返してけり。このとき玄象を奏でゐたりし鬼神おのが姿は現さで天井より繩につけたる琵琶を下したりとぞ。

玄象は彈くもの拙ければ腹立ちて鳴らず、塵ゐて巾はざるとき腹立ちて鳴らず、そのけしきあらはにぞ見ゆるといへれば生きたるもののやうにぞありける。されば白河院の御遊にて源經信これをつひに調べえず、また太宰大貳資通琵琶の妙手なりしかども、ときの帝より玄象をたまはりて彈けるにいと調べえざりしは玄象腹立ちたるゆゑなるべし。ほかに一條院の御前にて源信明信義兄弟それぞれ玄象牧馬を奏でしをりの勝り劣りのさま著聞集に語りていとともおもしろけれどもこと長ければここにてはさらにまねばでもありなむ。玄象もて彈くもの妙手ならねば鳴らず、たとひ妙手なりともけしきたがへば腹立ちて鳴らず。かくあやにくにむづかりて奏者を好み嫌ふことのあるは活けるものにことならず。さらに内裏燒亡ありしとき玄象いまだ人の抱き去らぬさきにわれとひとり庭に飛び出でたりとも云ひ傳へたり。かくも不思議なる玄象おぼろけの名器の列には數ふまじきにこそ。

玄象今の世には傳はらず、いついかにして失せぬるやらむ、いといぶかしけれど尋ねゆかむつまだになきぞくちをしき。二條院位に即かせたまひてほどなく内宴にて玄象彈かせたまひしこと著聞集に記せり。さらに二十年ほど經て、高倉院の治承二年清涼殿にて太政大臣藤原師長玄上を彈きしこと玉葉に載り著聞集にも説きたれば、平治治承のころほひ玄象な

ほ禁裏に留まりてありしことのみは否むべからず。世のやうやく末ざまに及ぶにつれて九重の内とてもわがために安からざらむを悟りて玄象のおのづから失せにしにてありけむ。かく云はむはさすがそらごとみだりごとめきたれど、そはともかくもあれ、玄象の隠見と朝儀の盛衰とあひ關ることなしとはなかなかに思ひがたかるべし。

玄象もと劉二郎なる琵琶師のものなりきとも、深草の帝承和のころの掃部頭藤原貞敏、遣唐使となりてかの國に渡りて琵琶を習ひけるとき師たりし廉承武より授けられしともいへり。中納言藤原諸葛の子玄上宰相のもてりし琵琶なりてふ傳へなきにあらねど、玄象はじめより本朝にありしにはあらで唐土（もろこし）より來りし名器なること疑ふべからず。

この琵琶につきてくさぐさのくすしくもあやしきことどもの語られぬるはいかなるゆゑなりやいぶかしきかたなきにあらず。そも異國（とつくに）よりもたらせる寶のたぐひなににてもあれよろづめでてやまぬがわが國人のなべての習ひなれば、きはめたる逸物なる唐國の琵琶をひたぶるに讃め尚び、そのあまりにさまざまの靈驗譚を作り出せるはげにさりがたきわざなりといはば、ひとわたりこそはさもありげに聞ゆべけれ。さはれこのうちあるいひざまいかにもおほざうにてことたらはねば、なほあかぬ心地してさながら諸はむはかたくぞある。

玄象靈異譚のゆゑよしを勘ふるに、ここに舶來賞玩の心たえてなしとこそはいふまじけれ、いかに唐土の名器を慕ひ懷しむ思ひあつかりけむとも、さばかりにてはかくさまざまの不思議なる傳への出で來ることわりあるまじきなり。

そも漢土にありし琵琶の名器少からず。そが中に玄象わけてめでたかりけむこと思ひはかるにたへたれども、かの國にありてはこれさへつひにあまたありし名器の一つにすぎざりけめばかしこにてはさまで珍しからで、廉承武もしは劉二郎が奏でゐたりしときは靈威のいやちこなりしためしことにありたりとしも思はれず。わが國に渡りてはじめて玄象をめぐる不思議なることのあれこれ出で來れるはげにいみじけれど、これかへりて唐國ならぬわが皇威を示してあまりありといはでやはあらむ。

唐國の名器玄象かしこより傳はりて後にそを彈くにたへたる名手のここに少からず現れぬるは、この琵琶にそなはれる性（さが）のわが風土にかなひたりしがゆゑにえもやありけむ。ことに九重の内、うつつにこそは見えがたけれ、なにとやらむ犯しがたきけはひ、わが皇御孫（すめみま）の御稜威（みいつ）ともいふべきものありて、玄象この御稜威をうけてこそはじめておのが内に祕めたる靈威を外に顯はすことを得しなれ。

仁明天皇の御宇に玄象本朝に渡りて後長く禁裏に藏めおかれたれど、村上天皇のころほひ羅城門に栖む鬼に奪はれしを博雅の三位の取り戻せしこと右に陳べりしがごとし。また内裏燒亡のをりおのづから庭に飛出でたりといへれど、これかの天德四年の炎上のことに

ほかなかるべし。さらに同じ帝ある夜清涼殿にて玄象をひとり靜かに彈きたまひしとき、ふと廉承武の靈かげのごとくに現れて夜もすがら主上に祕曲を授けまゐらせしこと十訓抄に説きたるはあやしきことこよなし。世下りて成りし玄象いへる申樂能（さるがくのう）あれど、ここにて仕手となれるは村上天皇の御魂にほかならではてに藤原師長ともども玄象を奏でたまふぞかしこき。世々の帝の內、玄象と關りたまへることわけて淺からざりしは天曆天德の聖主なりともやいひつべからむ。

玄象の琵琶につきて説ききたれることどもいづれも舶來名器の靈驗なれば、ただうちつけに辿るほどこそはわが國人の異國文物讃仰のさまをもはら示せるやにもおぼゆらめ、つまびらかにけみせば、わが朝家の皇威と異國の名器のいみじき感應を伺ふよすがともなるべければいともかしこくなほざりにはすますべからず。

玄象靈異のことさらに國風と舶來てふ名辭を對（むか）へて考へむに、國風と舶來とあひ競（きし）らふはつねのことなれど必ずあひ背きあひ斥くとも定めがたし。國風を尚ぶにつれていよいよ舶來を慕ひ、舶來のかへりて國風を明らむるなかだちとなるためし少からず。國風と舶來のたへなる交會を伺はしむるが玄象靈異譚なれど、これただ舶來賞玩のみかは。國風顯揚の助けともなるべくぞおぼゆらむかし。

（令和八年一月二十二日受附）